私を堕とせるのはただ一人？いや、ここからが恋人だし！

【第１１話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲…女子高生

白石彩夏…社長令嬢

神谷里見…女子高生

杉園愛梨…モデル

飯田早苗…女優

柏木奈子…千咲の叔母

白石健三（４２）…社長、彩夏の父

前田香…社長秘書

ジェームズ・ペリー（２１）…御曹司

スタッフ…モデル事務所のスタッフ

少女

少女の親

○モデルの事務所・プールの撮影所

千咲と愛梨、水着になって抱き合うような姿勢になり、撮影スタッフたちから写真を撮られている。スタッフは褒めの声を２人にかけている。

千咲M「わわわわわわわわ！　こここここんなちかちかちか近い近い近い」

千咲、顔を真っ赤にしている。

撮影が一旦ストップし、２人は休憩スペースへ。

千咲「こここんなの聞いてないんだけど？　わたしだけマイクロビキニとか！」

愛梨「えへへへ」

千咲「えへへじゃないっ！　も、もうポロリとかしそうで超はずい……」

愛梨「だめ、だった？」

愛梨、しゅんとする。

千咲「あ、だめじゃない……よ？　愛梨ちゃんと撮影できて、楽しい」

千咲、愛梨をなでなでする。

愛梨、千咲の胸を揉んでいる。

千咲「でも、えっちな撮影だからって、こ、こんなにおっぱい揉むこと、ないでしょっ、あ、あんっ、あんっ！」

千咲、アへ顔になっている。

愛梨「かわいいね」

千咲「も、揉むなぁっ！　はずいから！　AV撮影じゃないでしょうがっ！」

愛梨「でもこの後、ベッドで全裸で寝てる2人のシーン、あるよ？」

千咲「グラビアかよおおおお！　そういうことは先に言えよぉぉぇ！」

千咲の声が反響する。

千咲M「で、でも、愛梨ちゃんかわいいからいいかも！」

愛梨「なんか里見ちゃんみたいな喋り方」

愛梨、くすっと笑う。

○モデルの事務所・ベッドの撮影所

千咲と愛梨、全裸でベッドグラビアの撮影中。２人、抱き合っている。

千咲Ｍ「ななんでこんなエッチしてるみたいなポーズになってんの！　ムリムリムリムリムリムリムリムリ！」

スタッフ「はい、じゃあ杉園さん、柊さんの胸をぎゅっと揉んでみて！」

愛梨「はい」

千咲Ｍ「こんな撮影あるかあああああああ！　なんとかなるだろと思ってオーケーしちゃったけどはずいわ！」

愛梨、ゆっくり千咲の胸に触る。

千咲「あんっ！　あ、はぁんっ！」

千咲の喘ぎ声にスタッフたちが反応。

スタッフ「今のすごくいい！　柊さん、今の表情もう１回！」

千咲「そ、そんな演技何回も」

千咲Ｍ「まさかまた本気を撮られるってこと

!?　ううう嘘でしょ!?」

スタッフ「杉園さんは？」

愛梨「できますっ！」

千咲M「言っちゃったー！」

千咲、口をあんぐり開けて愛梨を見る。

スタッフ「柊さんも、行けますか？」

千咲「え、ちょっとはず」

愛梨、真剣な表情になる。

愛梨「千咲ちゃん。わたしね、モデルの撮影には本気なの」

○（回想）女子高・3の3教室

早苗「柊。あたしはね、女優の仕事に誇りを持っているの」

早苗、真面目な表情。

（回想終わり）

○モデルの事務所・ベッドの撮影場所

千咲M「この感じ、早苗ちゃんと同じ、本気の目だ」

愛梨「でも、無理なら断っていいからね。写真だから、動いた後のブレてないところ撮られる」

千咲「やるの前提かよおおおお！」

２人の会話を見守っているスタッフ。

千咲「わかりました、やります」

千咲、真剣な表情になる。

スタッフ「わかりました。それでは、撮影再会します！」

千咲と愛梨、ベッドに寝転び、抱き合う。

愛梨、千咲の胸を触る。

千咲「あんっ！」

千咲Ｍ「やっぱはずい！」

千咲、胸を愛梨に揉まれている。

千咲「あ！　あんっ！　ああああんっ！」

愛梨Ｍ「かわいい」

千咲「あんっ！　イク！　イクっ！」

千咲Ｍ「こんなのもうＡＶ撮影じゃん！　耐えられないっ！　愛梨ちゃん、上手いっ…

…」

千咲、体をビクビク震わせる。

千咲の震えが止まった瞬間、愛梨ポーズをとる。シャッター音が複数回鳴る。

○モデルの事務所・楽屋

千咲と愛梨、服を着ている。

スタッフ「柊さんの表情、正直杉園さんよりよかった」

愛梨「すごい、千咲ちゃん」

千咲「このパターン前もあったんだけど……」

千咲、息を整える。

スタッフ「柊さん。よかったら、ＡＶ女優にならない？」

千咲「絶対なりませんっ！」

千咲、強めに宣言。

○お好み焼き屋・内観

千咲と愛梨、横並びで席に座り、お好み焼きを食べている。

愛梨「今日は、ありがとうね。ちょっと、遅くなっちゃった」

時計が、１４時半を示している。

千咲「ううん、全然いいよ。まあＡＶ女優は疲れそうでやだけどね～。はあ、あっついね今日」

千咲、水をグラスにくみ、それをゆっくり飲み干す。

千咲「そういう意味じゃ、裸でもよかったのかな？」

愛梨「そうだね」

千咲「いやー。食生活管理とかありそうなのに、わざわざ希望聞いてくれてありがとうね！」

千咲、愛梨に向かって笑いかける。

愛梨、ドキッとする。

愛梨Ｍ「やっぱ、ドキドキする」

千咲「愛梨ちゃんってやっぱ、かわいいよね。うらやましい～！　普段から体系維持とか美容保湿とか、頑張ってるんでしょ？」

愛梨「あ、うんっ。さ、最近は特に、がんばってるから、……（ぼそぼそ何かを言う）の、ため、に」

愛梨、千咲に向けて上目遣いする。

千咲M「うわー！　かわいいー！」

千咲、胸を手で押さえる。

千咲「ため？　ためって何？」

愛梨「あ、それ、は」

愛梨、恥ずかしそうに縮こまる。

千咲「なにこれ、めっちゃかわいい……」

千咲、固まる。

千咲「あ」

愛梨「え」

２人、固まり、顔が赤くなる。

千咲「あああああの、いい今のは！　かわいいっていうか、その、愛梨ちゃんが普段から努力してるなぁって、お、思ったのよね！」

愛梨「あ、うんっ……！」

千咲「食べ終わったね。帰ろっか」

○柏木宅・寝室（夜）

千咲と柏木奈子、ベッドに寝転んでいる。千咲、顔を赤くしている。

千咲M「わ、なんか変になっちゃった～！これじゃあ、愛梨ちゃんのこと好きみたいじゃん！」

千咲、はっとする。

千咲M「あれ。こんなにいっぱい可愛いって思って、ドキドキして……なんで。もしかして、わたし、愛梨ちゃんのこと」

千咲、自分の胸にそっと触れる。

心臓の鼓動が手に伝わる。

○白石宅前（朝）

彩夏、家を出る。

彩夏N「今日は土曜日。わたしはちゃんと千咲に大好きって伝えたはいいけど、会社には千咲のことなんて伝えられなかった。きっと、女の子どうしじゃなくても許しても

らえなかった」

彩夏「はぁ……」

○（回想）女子高・校門（朝）

少女、千咲に袋詰めのお菓子を渡す。

少女の親「本当にありがとうございます」

千咲「いえいえ。きみが元気で、おねえちゃんもうれしいな」

少女「うん！」

千咲、少女の頭をなでなでする。少女、にっこり笑う。彩夏、その様子を遠くから眺める。

（回想終わり）

○白石宅前（朝）

彩夏、俯いて涙を流す。

彩夏「恋って、こんなにもつらかったんだ……」

彩夏の目の前に車が止まり、車から前田香が出てくる。

香「このたび社長秘書になりました、前田香と申します」

彩夏「そ、そうなんだ」

香「……白石様。まことに残念ながら、本日は御足労願います」

彩夏「……」

○白石インテリジェンス・駐車場（朝）

彩夏と香が乗った車が停車する。

２人、車から降りる。

○同・エレベーター（朝）

彩夏、香、その他社員が乗っている。

彩夏、暗い顔で俯いている。

音が鳴り、エレベーターの扉が開く。

彩夏たち、外に出る。

○同・廊下（朝）

社員たち、通りかかった彩夏と香にお辞儀と挨拶をする。

○同・社長室（朝）

香「失礼します」

彩夏と香、入室。

白石健三（４２）、社長の椅子に座って、机で作業している。

彩夏「こんな朝から作業を？」

健三「ああ。重要なことだ」

健三、彩夏の方を向く。

健三「今から、俺が社長に必要だと思うことを話す。彩夏、最も大切にすべきものは何かわかるか」

彩夏「えっと……」

健三「人だ」

彩夏「パパ……」

彩夏、表情が曇る。

健三「いや、俺をって意味じゃない。社員たちのことだ。技術など重要なことはいろいろあるが、人がいなければ始まらない」

彩夏「じゃあなんで、うちはＡＩを？」

健三「だからこそ、だ。ＡＩを使うと、尊い人の価値を忘れてしまう。だから、お互いを大切にしてほしいと、社員は家族だと、普段からみんなにも言っている。」

彩夏「そう、だね」

健三「だから、これからの企業のため……つまり社員のために。こんなことを頼めるのは彩夏しかいない。俺も幸美も既婚者だからな。今までも彩夏は、学業と会社の勉強を両立してきながら学年１位をとっている。娘に使いたくない言葉づかいだが、正直化け物だ。だから、彩夏以外に任せたくない」

彩夏「化け物とか、すごい褒めるじゃん」

健三「ああ」

彩夏「事業が成功すれば会社は安泰……だから結婚、ってことだよね」

健三「さっきから顔が暗いな。なら１つ言っておいてやろう。ペリーと会ったことがあるが、誠実で優しい男だった。気苦労をかけていたならすまない」

彩夏「よかった……」
健三「彩夏なら、少しくらい学校休んでも大丈夫だ。これから少し、会社の勉強をしてもらう」
彩夏「でも」
健三「何かあったら俺と香が助ける、大切な娘だからな」
香「はい、社長。わたしが、白石お嬢様をお助けします。それでは行きましょう、お嬢様。区別のため、お嬢様とお呼びになっても、よろしいですか」
彩夏「今更？　まあ、いいよ」
健三、心配そうに彩夏の暗い表情を見つめる。

○同・会議室
香、健三、役員たちが彩夏を見ている。
香「それではお嬢様、その封筒を開けてください」
彩夏「はい……」

彩夏、封筒を開け、中の紙を取り出す。
紙には何かが書かれている。
彩夏、それを読む。
彩夏に正式に社長の座を継ぐという内容。
健三「知っての通り、彩夏は学業と会社の勉強を両立しながら学年1位をとっている」
健三、一同に向かって喋る。
彩夏M「今更だけど、普通に成績共有されてる……まあいいけど」
健三「同族経営で会社を私物化するなと思っている人もいることだろう。だが、普段から言っているように、わたしは社員は全員家族だと思って大切にしている。だからどうか、彩夏を社長にしてほしい。この通りだ」
健三、頭を下げる。
彩夏M「パパはいつもそうやって、優しい。だから、断りにくい」
役員たちから、拍手が起こる。

彩夏M「けっこう前はまあまあ反対されてたのに、今はこんなに拍手か……」

彩夏、真顔で健三を見つめる。

○女子高・校門（朝）

生徒たちが校門をくぐる。

千咲、ぼーっとしながら校門の前に立つ。

千咲「帰ろうかな。今は学校行く気分じゃないや」

千咲M「まだまだ弱いなぁ、わたし。彩夏と喧嘩して、早苗ちゃんに冷たい態度とられて、里見ちゃんと気まずくなって。そのたびにずっと泣いてふさぎ込んで、ダメダメじゃん。こんなんで、みんなを幸せにできないよ……」

千咲、目に涙を浮かべる。

千咲「あ、あ、あ」

千咲、震える。

千咲「あ、あああ、あああああ」

千咲の視界が涙でぼやける。
何か大きいものが千咲に迫る。
千咲、引っ張られ、尻もちをつく。
トラックが千咲の前を通り過ぎる。
千咲、目を拭いて走り去るトラックを見る。
千咲「ありがとうございま……え」
千咲、顔をあげ、驚いた顔をする。
ジェームズ・ペリー「ダイジョウブ？」

○（回想）同・3の3教室（朝）
里見「ニュース見てねえのか？」
里見、スマホを見せる。ニュースサイトに、ペリーの顔が載っている。
（回想終わり）

○同・校門（朝）
生徒たち、千咲とペリーをちらちら見ながら校門を通る。
千咲M「な、なんでここに？　いや、なんで

じゃない。彩夏に会いに来たんだ。まだギリ門くぐってないからセーフだ」

ペリー「ダイジョウブ？」

千咲「あ、ありがとうございます」

ペリー、千咲の手を取り、起き上がらせる。

ペリー「ワライトルネ」

ペリー、千咲に向かって笑いかける。

千咲「笑い？」

ペリー「ソウネ。フィアンセ、ワライスキネ。フィアンセニアイニキタネ。ジャマハヨクナイカラ、アッタラスコシダケハナスネ」

千咲M「まさか」

○（回想）同・3の3教室（朝）

彩夏「お笑い芸人とかなんでもいいから、人を笑わせる職業につく！」

（回想終わり）

○同・校門（朝）

千咲M「連絡とか取り合ってるんだ。で、フィアンセって言い方からたぶん、もうかなり話し合いは進んでて、わたしと彩夏の関係を知らない」

ペリー「ナミダフクネ」

千咲「なんで、なんでそんなに優しいの……」

ペリー「ヤサシイ、フィアンセノモクヒョウネ」

千咲「あ、あ、ああ」

千咲の目から涙が零れ落ちる。

千咲「優しくしないでよ！」

ペリー「ドウイウコトネ？　ナイテル、ツライ、ヨクナイネ」

千咲、泣き顔でペリーと向かい合い、

千咲「優しかったらダメじゃん！　優しくしないでよ！　優しかったら否定できない！　あなたのせいで！」

叫ぶ。

千咲M「違う。わたしの話なんかわかるはずもない」

ペリー「ワカラナイネ。ダケド、ミステラレナイネ。ホラホラ、スマイルネ」

ペリー、千咲に向かって笑顔を作る。

千咲、涙を浮かべながら走り去る。その背中を見つめるペリー。

雨が降ってくる。

○通学路（朝）

雨が降っている。

千咲、泣きながら走っている。

千咲M「最悪だ！　彩夏の結婚相手にあんなひどいこと！　わたしが弱いせいで！　わたしは、彩夏の隣に立つ資格のないひどい女の子だ！」

千咲、転ぶ。

千咲「あああああ！　ああああああああ！　うわあああああああああ！」

千咲、顔をぐちゃぐちゃにしながら大声で泣く。

○女子高・３の３教室（朝）

里見、早苗、愛梨が集まって会話している。

里見「なんか、ジェームズ・ペリーが来てたらしいぜ。轢かれそうになってた女の子助けたって、ちょっとだけ噂んなってる。さすが御曹司、注目されてんな」

早苗「なんで……いや、お互いのことを共有するところまでいっているということね」

里見「詳細はわかんねえけど、女の子を泣かしたとか。なんで助けられて泣いてんだよおぉぇ！」

早苗「女の子？　この学校の？」

里見「ああ。制服着てたらしい」

早苗「らしいが多いわよ。まあ、ペリーは聖人君子だって評されてることもあるみたいだから信用はできる情報なのかしら」

愛梨「ふしぎ、だね」

早苗「そうね。なにがあったのかしら」

里見「そんじゃあ納得だな、轢かれた……女

の子……助、け」

里見、数秒止まる。

里見「まさか」

早苗「でしょうね」

里見「千咲か！」